

韓国併合100年

(2009年8月)

column6

北陸大学教育能力開発センター准教授

小南 浩一

来年2010年は、1910(明治43)年に日本が韓国を併合してちょうど100年になる。韓国併合の象徴的人物とされる伊藤博文が安重根に殺害されたのがその前年であるから、今年には伊藤殺害100年にあたる。

韓国はもとより日本でも「併合100年」を機に、韓国併合をめぐる様々な企画や行事が展開され、あらためて歴史が想起されることになる。

「韓国併合」100年市民ネットワーク(韓国ではこれに連携して「韓日平和百年市民ネット」が立ち上げられた)は今春、京都の龍谷大学で「安重根遺筆、関係資料展」を開催し、これまで一般に公開されなかった安重根の書を展示した。処刑された1910年3月に書いたとされる書には、「敏而好学不恥下問」がある。「敏にして学問を好み、自分より下の人に教えを請うのを恥としない」は、死を前にしてなお学問への情熱止みがたき安重根の強い意志と深い教養がうかがえる。

先日、「日本近現代史」の私の授業を受けていた学生から「韓国併合と言うが、それは韓国が望んだことではないのか」といった類の質問を受けた。彼は『マンガ 嫌韓流』を読み、インターネット上での掲示板などをよく見るといふ。そこでは韓国側の主張を批判する「過激な」議論が展開されているようである。

私は彼に、まずは韓国併合に関する基本的な歴史書を読んでほしいと言って、海野福寿『韓国併合』岩波新書、1995年などいくつかの書籍を紹介した。

ところで、日本の高校生が学ぶ「日本史」の教科書では、韓国併合の記述はどのようになっているのか。第1次・第2次日韓協約→ハグ密使事件→第3次日韓協約→義兵運動→伊藤殺害→韓国併合と併合に至るプロセスが書かれている。しかし、例えば、「1905年に第2次日韓協約を結んで韓国の外交権をうばい…」と記述されているが、これではこの第2次日韓協約がどのような経緯で結ばれたのか全く分からない。伊藤が韓国の皇帝や大臣を軍事的圧力のもとで強制調印させたことがわからなければ、彼が初代統監になったことも理解できない。

また、さきの学生の質問「韓国併合は韓国側が望んだ」といったような発言は、義兵闘争などの植民地化反対闘争の記述が不十分なことにもよる。なるほど教科書では義兵闘争が、第3次日韓協約による韓国軍隊解散を機に高揚したことは書かれている。しかし、それより以前、日清戦争時にも抗日闘争はあったし、さらに併合後にも活発に展開された。併合後の憲兵政治の実態について触れていない日本の教科書では、抗日闘争の連続性がわからない。憲兵政治の重要な任務が、「種々の独立運動結社に関係した独立志士を逮捕、拷問して独立運動を抹殺」することにあつたからである。また、義兵闘争だけでなく、都市の知識人・学生・商工業者らによる愛国啓蒙運動も展開された。そして、総督府による土地調査事業の記述が不十分なために、三・一運動や関東大震災時の虐殺との関連も理解できない。このように日本の教科書では、日露戦争後から敗戦までの日本と韓国の関係を理解するのは大変難しい。

1990年代の初頭から、日本と韓国の特に近代史における歴史教科書の記述について、両国の研究者や教員の交流がもたれ、問題点や課題が検討されている。しかし、併合100年にして今なお、両国の歴史認識には大きなミゾが横たわっている。

日本と韓国の「協力の増大と平和的な共存と共同の繁栄のために」(李奎浩)、「現在と過去との対話」としての歴史学がなすべきことは多い。